ぶら探訪

その弐拾
尾道歩き「パート2」（勧商場小路から長江口広場まで）

万緑香るさわやかなこの季節、路地を歩けば昭和の風が吹きひっそりと残っている井戸に生活のなごりを感じことが出来るかもしれません。

前回は「風呂小路」までで終了しましたから、今回は「勧商場から六十六銀行跡や古びた家屋が郷愁を誘う狭い路地を歩き熊野神社、磯の弁天など」を見ながらのゆったり歩きを楽しむ「お散歩感覚」の探訪です。

町歩きが好き、穴場めぐりに興味がある会員には魅力あふれるぶら探訪になると思います。

路地の中にある井戸

熊野神社の特徴のある狛犬

丹花小路の文政六年と刻銘がある常夜燈

元住友銀行だった建物

平成 26 年(2014) 5 月 31 日(土)

備陽史探訪の会（近世・近代史部会）　　岡田宏一郎

「ぶら探訪　尾道歩きパート2」のコース地図

（尾道市街圖誌　昭和六年六月発行）を使用

昭和六年六月十日印刷
昭和六年六月十五日發行　改訂第八版

不許複製

編纂兼發行者　尾道市七堂町　宮地三保松

發行元　尾道市土堂町　玉文堂

印刷所　福山市米屋町　耕文館

路地歩き・井戸めぐりコース順の写真

ほぼこの順路で歩きます。探訪の順に見どころと思われるところを撮っていますが自分の感性で観察すると面白いかもしれません。

写真にコメント・説明を書いていますので、家庭でもう一度見直すと歩いた場所や歩いた路地や見てきた井戸などの風景を思い出して見て下さい。

ぶら探訪で見たところや内容を再度学習できるかもしれません。

前回、この「亀齢水井戸」でぶら探訪は終わったので、今日はここから歩き始める。

勧商場小路に入って行く。(看板の「歓」はまちがい)
右の駐車場跡地には「犬石洋品・化粧品店」があった。昭和20年代ごろは小野m基地でも高級で大きな店であった。

右の建物は山根産婦人科医院跡の建物。

突き当りは石段になっている。江戸時代にはここが海岸で船着場跡だといわれている。

石段下の道。右に進み「石屋町」に出る。
石屋町は旧町名で現在は「久保一丁目」になる。

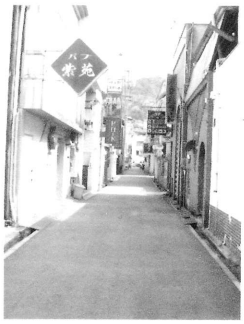
常称寺大門横の「尼寺小路あと」　今は通れない。

石屋町の通り。表示の石柱がある。

新開の飲み屋街を右に折れると「井隅神社」がある。旧井隅町の表示がある。
「昭和五年五月建之」と「世話人　都楼　東

玉垣の柱に「明治十四年五月」とある。玉垣に刻まれた名前にも注意して見よう。

近くにある「二つ井戸」と地蔵仏。井戸にはよく祀られているので見かける。



新開の飲み屋街の風景。仲の町といって元遊郭が集まっていたところ。

両側に映画館が三軒あったところ。左側に老舗の映画館「玉栄館」があったところ。

昭和三年には営業していた古い映画館の跡地。奥が駐車場になっていることからかなり広い敷地であったことが分かる。

最も路地らしい昔の光景が感じられる小路を入って行く。小路の正式な名前はないが、地元では「小鉢小路」とも言う人がいた。

古びた家屋に当時の雰囲気と郷愁を感じる。

中ほどにある井戸。小路を歩くと井戸をよく見かける。

かなり傷んでいる建物を見た。時代を小路から感じる。

本通りに出た。。前回みた更地には建物が建てられ、駐車場になっていた。

「鎮神小路」の入口。奥に「熊野神社」が見える。

「鎮神小路」と左の「築地小路」が合流した所の家がなくなり更地になっている。
左の奥には戦前からの建物が残っている。

熊野神社の鳥居と満開の桜。鳥居には「文政六癸未五月吉日」の刻銘がある。

「行啓紀念の碑」　神社修繕寄附者の名前の中に、山根源四郎や豪商の橋本太吉などの名前がある。　世話人には「水尾町一同」とある。

小さな祠と左後方の石仏群。

注目した小さな狛犬。尾の部分と胴体がわれて離れている。

前から見るとかなり可愛い。足が短いのに注目してほしい。

鳥居には「石工　山根屋源四郎傳篤」の名前がある。
左の鎮神小路から入ってきた。

鳥居前から見た風景。左が鎮神小路で右が築地小路。建物跡地の手前に井戸がある

熊野神社石垣下にある「水尾井」　井戸枠の内側に明治時代の年号が刻まれている。水はきれいで今も飲まれている。

横にも井戸がある。確認していないが電動ポンプがあり使われているようだ。

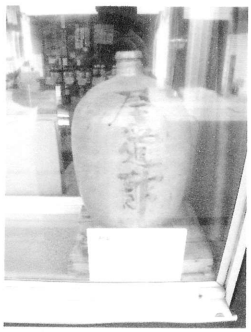
井戸枠に名前が彫られているが物にさえぎられ読み取れない。（築地井かな？とも思った）

築地小路の家の下をくぐり出て行く。

築地小路から出たところ。石畳みがすりへっていることにも注意してほしい。

啓文社（書店）本店跡。かつては大きな倉庫を店にしていた。右の建物はレトロな建物で洋服店である。

尾道造酢の建物。大正七年に6軒の造酢業者が合併して誕生した。



店に飾られている「酢徳利」　遠く秋田、北海道までこの容器で運ばれていた。

「カクホシ　最上清酢」とある尾道造酢の看板と奥に陳列されている様々な酢の製品。

水尾小路の町並み。ゆるやかな坂になっている。水が尾のように流れていたからこの名がついたといわれている。

通りを下ると井戸がある。井戸の中は草が生えており使われてようだ。昭和20年代ごろには使われていた。

左の建物（パーキング）の場所が「第六十六国立銀行」があったところである。　その右側の建物が「元尾道銀行の建物」である。　のち藝備銀行から広島銀行東支店。現在は「おのみち歴史博物館」として使われている。

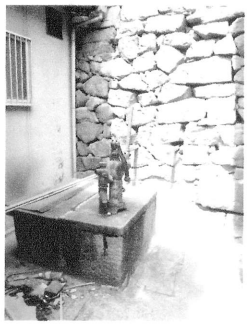
橋本小路を上がって行くと本通りに出る。この本通は西国街道（山陽道）である。

広い空き地（駐車場）は昭和20年代ごろまで営業していた大松百貨店跡である。戦前は尾道を代表する大型店舗であった。

丹花小路入口。向うに常夜灯が見える。この道は長江から新開に行く近道でもあった。

丹花小路より一本東に入った小路を行く。更地のところには古びた蔵があり、昔の雰囲気が残っていたところであった。

突き当りのところにある地蔵さん。右に折れて進む。



家の軒下を通り入って行くが行き止まりである。ここにも錆びついたポンプがあるが使われていない。
小路には必ずと言ってもいいほど井戸がある。

丹花小路はここから段々となる。この道は江戸時代からよく通られていた道で常夜灯があることからもわかる。

金毘羅大権現　常夜灯。　以前は江戸時代の雰囲気が感じられた小路であった。

常夜燈の後ろに「文政六年癸未九月吉日」とある。

常夜燈そばにある井戸。　「大正四年十一月設」とある。

井戸から石段を上がり行く。

この先は行き止まりである。昭和戦前の香りがする住宅がある。

小路の先は戦時中に建物疎開で建物が壊され削られてできた国道。　この向こうに道が続き線路を渡ることができた。建物の向こうに荒神社があり長江口の旧道へとつながっていた。

国道側から見た丹花小路。この石段を上がり常夜灯前に出て戻り、本通りに出る。

丹花小路の風景。突き当りが本通である。

丹花小路の　入口。標示の柱が立てられている。

本通りから南に下るのが「三好屋小路」である。中ほどに「高尾稲荷大明神」がある。ここは昔、三好屋という呉服屋があったことからこの名がついたという。

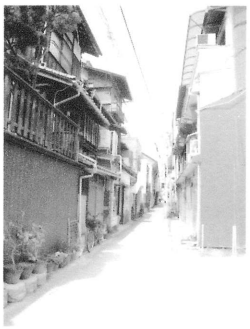
稲荷大明神を西横に折れると石仏がある。気になったがなぜここにあるのか、またいわれは不明である。

今蔵小路の中ほどにある「大國水」の井戸。現在も使われており、地蔵仏と祠が祀られている。

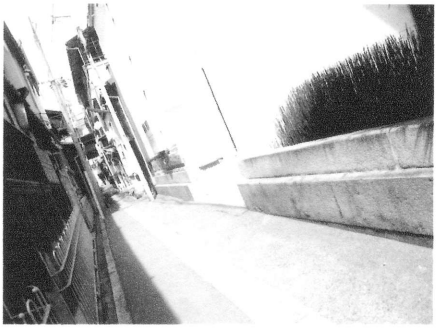
下ると「米場町」に出る。右の建物は「元　住友銀行跡」で現在は尾道市役所分庁舎となっている。

今も残っている倉庫。以前は「のこぎりとノコの目立をしていた。
手前の建物は元病院だった。

この小路が「小川町　本陣跡」で豪商の小川邸があったことからこの町名とこの邸宅が本陣に使われていた。



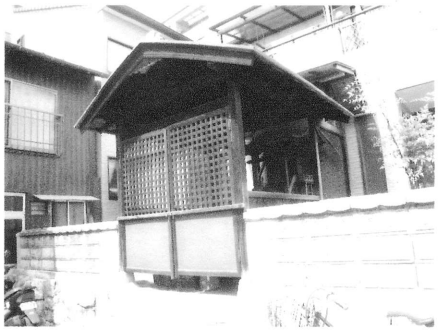
小川町の小路にある木造3階建ての家。



旧本陣でもあった邸宅の小川家（笠岡屋）の土台石と思われる。

この勝手口の戸に昭和の時代と生活感を感じる。

本通りを出て病院横の小路に入る。以前はあった建物がなくなり更地になっている。だが井戸だけは残っていた。正面の家と石



病院ができて雰囲気が大きく変わってしまったが、荒神社はそのままである。

この狭い路地を出たところが「杓屋小路」である。昔は「叶町」と言われていた。

杓屋小路を出たところから見た光景。

磯の弁天さん。当時はこの奥の自動車があるところに位置していた。

「磯の弁天さん」　注連柱には「播磨屋伊右衛門」と「津田新兵衛」の名前が刻まれ、「嘉永二季歳己酉七月吉日」の刻銘がある。

玉垣には「大黒丸次郎」「明神丸久兵衛」「福生丸卯三郎」など、多くの船名と船主（船頭）の名前がある。

こちらの玉垣にも同じように船名と船頭の名前がある。どこから来た船なのかは不明。

ガードをくぐれば旧道の長江通りである。ここに畳表の問屋が集中していた。

杓屋小路を出ると標示がある。

長江口の広場前から「胡小路跡」(右車が止まっている道)と「ヌリヤ小路跡」(左の車が走っている道路)を見る。
まん中の「鉄塔電柱」は昭和初期からのもので、現在もただ1基だけ残っていて使われている。

昭和20年に建物疎開で広げられた「薬師通り」の風景。
右の建物は中国銀行で、もと「西原銀行」であった。

ここで「クイズ」です。
戦時中に建物が壊され道路が広げられたが、「どちら側の建物か、または両側とも建物が壊されたか？」

(1)　左側の建物だけが壊れて道が広げられた。
(2)　左側と右側の両方の建物が壊され道が広げられた。
(3)　右がわの建物だけが壊されて道路が広げられた。

さて、何番が正解でしょうか。

次回の「ぶら探訪　尾道歩きパート3」の予告写真

この小路が「鍛冶屋町」で、昭和20年代ごろは鍛冶屋があった。
中世には刀鍛冶が住んでいて「尾道刀」の刀鍛冶の碑が艮神社にある。

薬師堂通りを下り「中浜通り」の角に「出雲大社道」の道標がある。横に井戸もある。

次回はこれらを見ながらのブラ探訪です。

尾道の路地について

尾道は戦災の被害を受けていないため近世から明治・大正にかけての町割りや路地が色濃く残り、文化や生活が一体として今もなお見ることが出来る。

そこに郷愁を感じたのか各地から訪ねてくる観光客もあると言われる。

近年、変容が目立つ路地ではあるが、それぞれの由来や住民の思いがあり生活の舞台として受け継がれている。そうしたことから尾道市当局も主要な路地(小路)に「案内石柱」を立て観光にも役立てている。

小路網は鉄道線より南側の市街地を南北に走っているが、戦時中に鉄道を護る目的で建物疎開により家屋が倒され東西にわたる幹線道路が作られた。

特に駅前から浄土寺下までの国道線は重要な幹線道路となっている。現在なら極めて実現が困難な道路づくりであるが戦時中という強制力で出来上がった道である。

南北の骨格となる街路として拡張されたのが「薬師堂通り」「渡場通り」である。これらの小路名は文政四年の「尾道町絵図」や明治・大正・昭和初年などの地図からも確認できる。

西国街道（山陽道）であった本通りから両側にある寺社に向かう小路名に西寺小路（西國寺)、築島小路（八幡大門）や寺への参道として〇〇大門（常称寺大門、宝土寺大門など）の名前が見られる。また御堂につながる「薬師堂、荒神堂、浮御堂」などの小路名もある。

港湾機能に由来する「渡場小路、ハマノ小路」などもある。商人の旧邸宅や商売に関する小路名もあり「アメヤ小路」(飴屋)「トキヤ小路」(研屋)、本陣に使われた小川氏（笠岡屋）の小川小路（町)、灰屋橋本家に由来する橋本小路（町）があり、南北の奥行きが深く本通りの街道から海岸まで続いていた。
小路の名称は「字」（あざ）として使われていたが、明治 21 年の地番改正で小路名は消すことになったが小川町、橋本町、西橋町など通称の町名として小路にちなんだ名前が使われている。また鍛冶屋町、石屋町など職人が住んでいた小路名も主要な街路としての渡場町、薬師堂町、荒神堂町が残っている。

ただ「石畳小路」や「うず潮小路」は近年になってつけられた通称であって歴史的な由来からくるものではない。

尾道市は市街地活性化事業として小路の環境整備を手掛け、「歴史的風致維持向上計画事業」のための講演会などを開いている。また商店街も力を入れて小路マップを作成している。

参考文献「路地からのまちづくり　西村幸雄　編著　学芸出版」

尾道石工と石造物

尾道の石工は常称寺大門を南に下る小路が「石屋町」という石屋が集中していた町である。その他、石屋は島々から運ばれてきた花崗岩が積み下ろしのしやすい海岸にも多くあった。

昭和20年代頃までは盛んに墓石や灯籠などを造り、ノミの音が聞こえていた。尾道石工の技術は特に優れ、大正天皇の御大典の時、石灯籠を宮内庁に献上した。

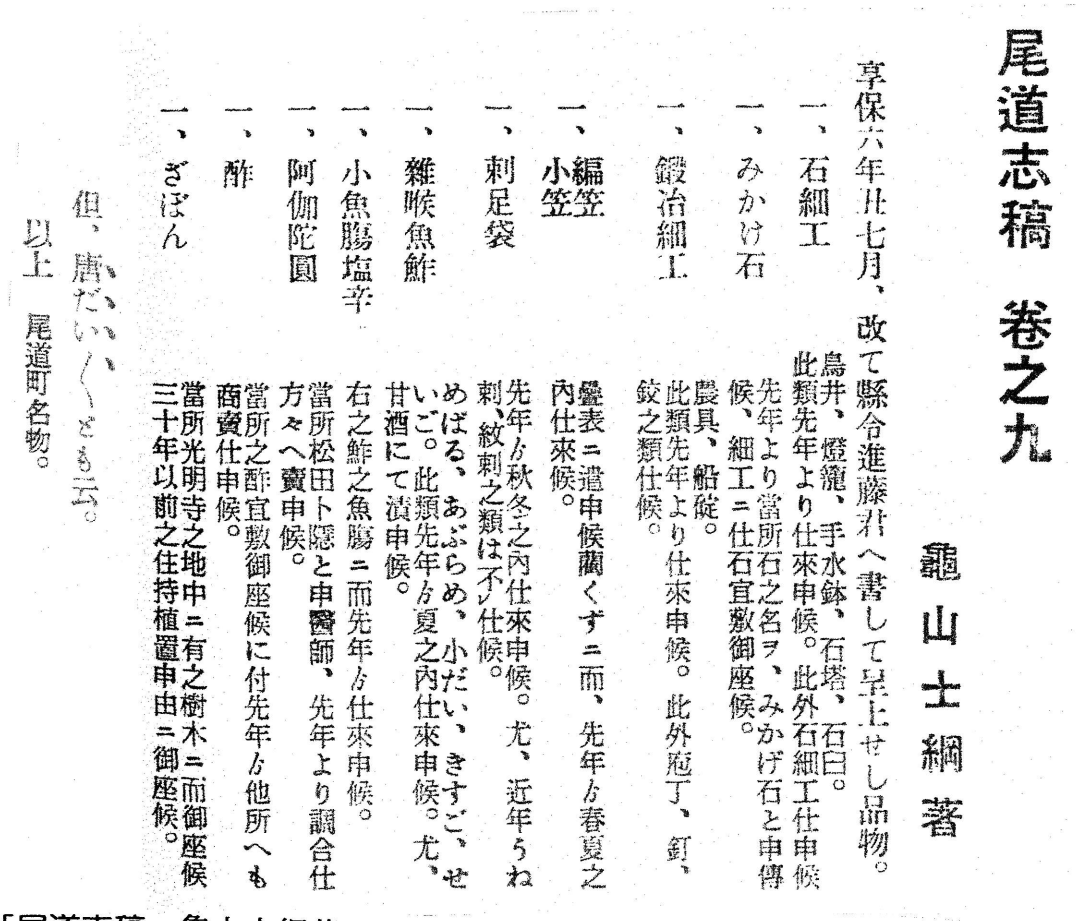
尾道石工の活動を示す石造物として松山市の湯釜薬師の石標に「享禄四年（1531）石工備後尾道住□阿」の銘が残っている。尾道石工の手になる石造物は北前船によって、山陰、北陸など日本海側との交易が盛んになると相当搬出されている。これは帰り船として石材を積むことでバラストとして船の安定を図る役目も兼ねたものであった。

石造物として「鳥取市加露の加露神社の石灯篭」には「寛政十二年申　尾道石工勘十郎作」とある。「新潟県佐渡島の小木町宿根木の石橋や神社の鳥居」も尾道石工の手になるもので白山神社の鳥居には「安永二年九月十五日　施主高津勘四郎　石工備後国尾道石工与四郎作」とある。その他「富山県新湊町庄西町日枝神社の石灯篭」「富山県射水郡小郡待十社大神の狛犬」など各地に残っている。私も山口県周防大島の油良八幡宮で「弘化四未十二月」（1847）の年号のある「尾道石工藤原小七郎正光作」と刻まれた狛犬を見ている。

このように各地に散らばっている尾道石工の石造物を確認するのも興味あることである。

江戸期の尾道町の産物・名物について（尾道志稿より）

石細工や農具や碇、包丁、釘などの鍛冶細工、藺くずを使った編笠、それに前回の会報で紹介した「雑喉魚鮓」や「酢」「阿伽陀圓」（漢方薬）などが書かれていて、尾道町の名物として書かれている。



尾道志稿　巻之九

龜山士綱著

享保六年丑七月、改て縣令進藤君へ書して呈上せし品物。

一、石細工　鳥井、燈籠、手水鉢、石塔、石臼。此類先年より仕來申候。此外石細工仕申候

一、みかけ石　先年より當所石之名ヲ、みかげ石と申傳候、細工ニ仕石宜敷御座候。

一、鍛冶細工　農具、船碇。此類先年より仕來申候。此外庖丁、釘、鉸之類仕候。

一、編笠　疊表ニ遣申候藺くずニ而、先年ゟ春夏之内仕來候。

一、刺足袋　先年ゟ秋冬之内仕來申候。尤、近年うね刺、紋刺之類は不ノ仕候。

一、雑喉魚鮓　めばる、あぶらめ、小だい、きすご、せいご。此類先年ゟ夏之内仕來申候。尤、甘酒にて漬申候。

一、小魚腸塩辛　右之鮓之魚腸ニ而先年ゟ仕來申候。

一、阿伽陀圓　當所松田ト隱と申醫師、先年より調合仕方々へ賣申候。

一、酢　當所之酢宜敷御座候に付先年ゟ他所へも商賣仕申候。

一、ざぼん　當所光明寺之地中ニ有之樹木ニ而御座候三十年以前之住持植置申由ニ御座候。

但、唐だいだいくゝとも云。

以上　尾道町名物。

「尾道志稿　龜山士綱著」

明治三十六年発行の「尾道案内」の広告より

明治期にはこのように多くの醸造酢屋があったことが分かる。

中央の「カクホシ印」の酢は天正十年の創業で大正七年に六つの造酢屋が合併している。この広告にはないが明治 17 年創業で栗原村にあった「杉田与兵衛」造酢商店は今も栗原町で営業している。（造酢屋は現在二軒だけである）

勧商場小路に進む前に「昭和54年の大火後、古い住宅と路地が再開発され「久保ハッピータウン」として生まれ変わった町並み風景。

昭和54年6月1日未明「市内最大の大火」があり、再開発された「久保ハッピータウン」の町並み。

同じく新しくなった新しい町並み。最もゴミゴミしていた古い路地と飲食店が密集していたところ。

下〈南から〉から見た大火跡の町並み風景。

今回あるく尾道町の町名について（尾道志稿より）

「尾道志稿」は文化十三年に完成した地誌史料で、尾道の住人亀山氏の著によるものである。土綱は諱で字は紀卿といい、俗称は本助である。菅茶山にも学び頼山陽、田野（ママ）村竹田とも交わっている。

志綱の墓は土堂町の信行寺にある（郵便局の北側線路そば）

尾道志綱は「巻之一から巻之十一」と「後編」（巻之上、巻之中、巻之下の三巻）から構成されている。江戸期の尾道を知るために役立つ史料である。

尾道志稿　巻之一

江なるよし。詳に塔寺の部に出す。

長江新町　東側久保町に屬す、西側十四日町に屬す。

人家建並しは後年のことゝ見へたり、其年代分りかたし。

新開　久保本町南裏、宮崎裏迄。

久保町年誌ニ云。宮崎裏海藏寺沖、八幡築出し迄、長七十五間、横坪三十五間の新開發起願主、當町松本千之助とあり。元祿三年午三月上訴し、土工の初りしは同十一年寅三月下旬のよし。

米場新地　藥師堂濱東方久保町より十四日町にかゝる。

此新地を築出せしは、寶暦五年乙亥四月、縣令藥師寺君の時也。同年七月初旬までに成就し、其年の十月より此地に米穀市始りしをもて名つけるなり。

沙寄場新地　久保町新開裏新地、娼家あり。

鴉子庵稻井が著せし塵塚と云書に、古への娼家ありしは、才之前（屬二土堂町一）とも、又は柳小路（屬二十四日町一）とも云とあり。遙の後年になり、渡し場（屬二土堂町一）に移す。其後、此沙寄場新地へ娼家を建しは、縣令土屋君の代也。尤此地を築しは縣令藥師寺君の代、寶暦年中のよし。

十四日町　當境三分の一を云。

塵塚に云。古へは叶小路と胡小路との間空地にて、毎月十四日に市たち有し由。さすれは十四日市町なるを、下畧して唱しならん。

第9661号　1979年6月2日（土曜日）　山陽日日新聞

飲食店など45棟を全半焼

久保二丁目で早朝の大火

市内最大の火災に

一日午前五時半ごろ、尾道市久保二丁目九番街から出火した大火はバー、スタンドなど飲食、風俗営業関係や民家四五棟、六一店を全半焼ふたりが重軽傷を負い、約四四〇〇平方㍍を焼き、市内の建物火災で最大規模の大火となった。罹災二一世帯、六四人。

同朝五時四十九分、〝一一九番〟で通報をうけた尾道地区消防本部ならびに消防団からハシゴ車をはじめ車両百台、六六〇人が出動、久保本通りと市公会堂前を中心に東西両面からホースを引き込み消火にあたった。同七時二十分に火勢を押えたものの、久保本通り側が東の高橋洋品店、西側の金幸食堂、南側の一にあたる一角を紅蓮の炎が総なめし、六店約三〇〇）の約五分四人が焼けだされ、昼すぎになっても残火の煙がたちのぼり手のつけられない状態だった。

この火事で火元近くの北側にあたる家事手伝い魚谷　薫さん（三）が二階から飛び降り両足を骨折し治療三か月の重傷を、また消火作業中の中分団員住友栄次郎さん（三九）が足に治療十五日間のケガを負った。

出火原因については尾道署と消防本部で調べているが、世羅タバコ店の数軒下ではないかとみられ、午後から予定していた合同検証を二日に延期した。

損害は二億円をこえるものとみられている。

狭い小路に塞がる

痛い通報の遅れ

市内最大規模の大火になった原因として三十九年二月六日の三軒家大火と同様、通報がかなり遅れたことと、異常乾燥注意報下で屋が壁にあたるほど狭い小路に塞がれ、木造家屋が密集、さらに建物のうえに積みあげたような造築家屋が多く大火を招いた。

それにしても風がなく、すでに夜が明けかかっていたため混乱が免がれ、飲楽街の住人にとっては寝込みを襲われながら犠牲者がでなかったものでこれに風でもあったらと類焼を免がれた付近の住民は震えながら話していた。

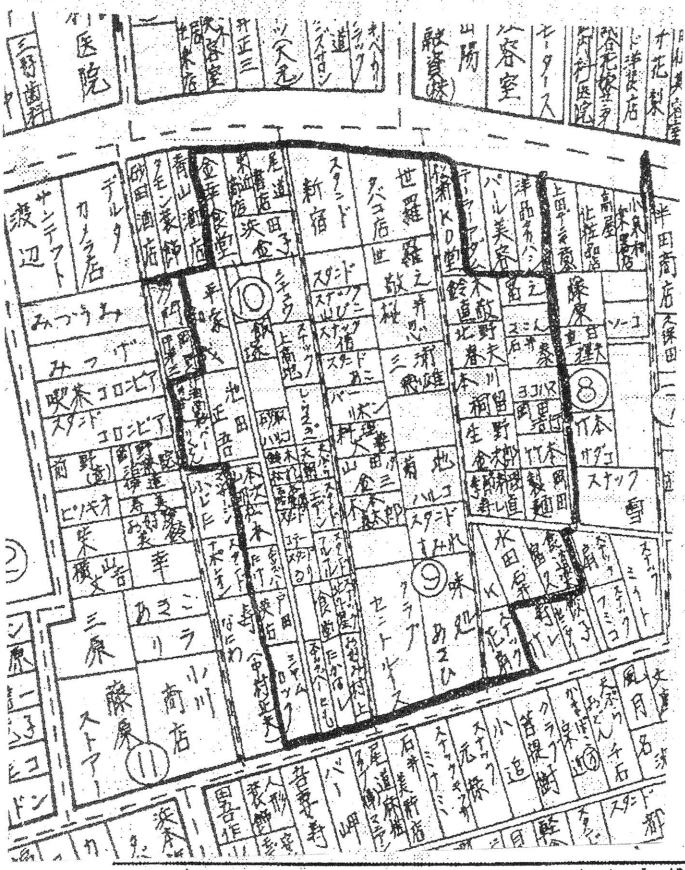
火災の第一報を消防にいれた世羅タバコ店の山陽融資内、新宅義孝さん（三七）のはなしでは「仕事に行くため道路に出たところ、煙がのぼっていたため火災だと思い通報した。このあと小路に駆けこんだところ、タバコ店から三軒奥の三浦徳松さん（六九）方の南側軒下から炎がのぞき、付近の人たちに火事だとしらせた」といっている。

また両足を折った魚谷さんは「三浦さんの北隣りですが、二階に寝ていて煙にまかれ目をさまし、母親などおこし避難させましたが、あわてていて二階から飛びおりました。まだそのときには炎はみませんでしたが、飛びおりた直後に南側の上のほうから火が出ていたようです」と語っていた。

久保地区を舟橋牛乳の配達をしていた西久保町、鍛冶秀夫さん（三三）は「五時四十分ごろ発見　五時五十分ごろ消防に通報、六時ごろ消防車が到着、中分団は六時五分にきた」と語っている。

同氏は消防東分団副分団長を歴任している。

焼けだされた地域（太線内が全焼）



明治三十六年発行の「尾道案内」の地図や「藝藩通志」・「大正十三年の地図」と比べて見ましょう。 かなり違っていることに気がつくと思います。

(1) 高等女学校（現県立尾道東高等学校。林芙美子の出身校）の位置が違っている。

(2)「勧商場」が二か所ある。今回探訪する小路は右側の位置にある。

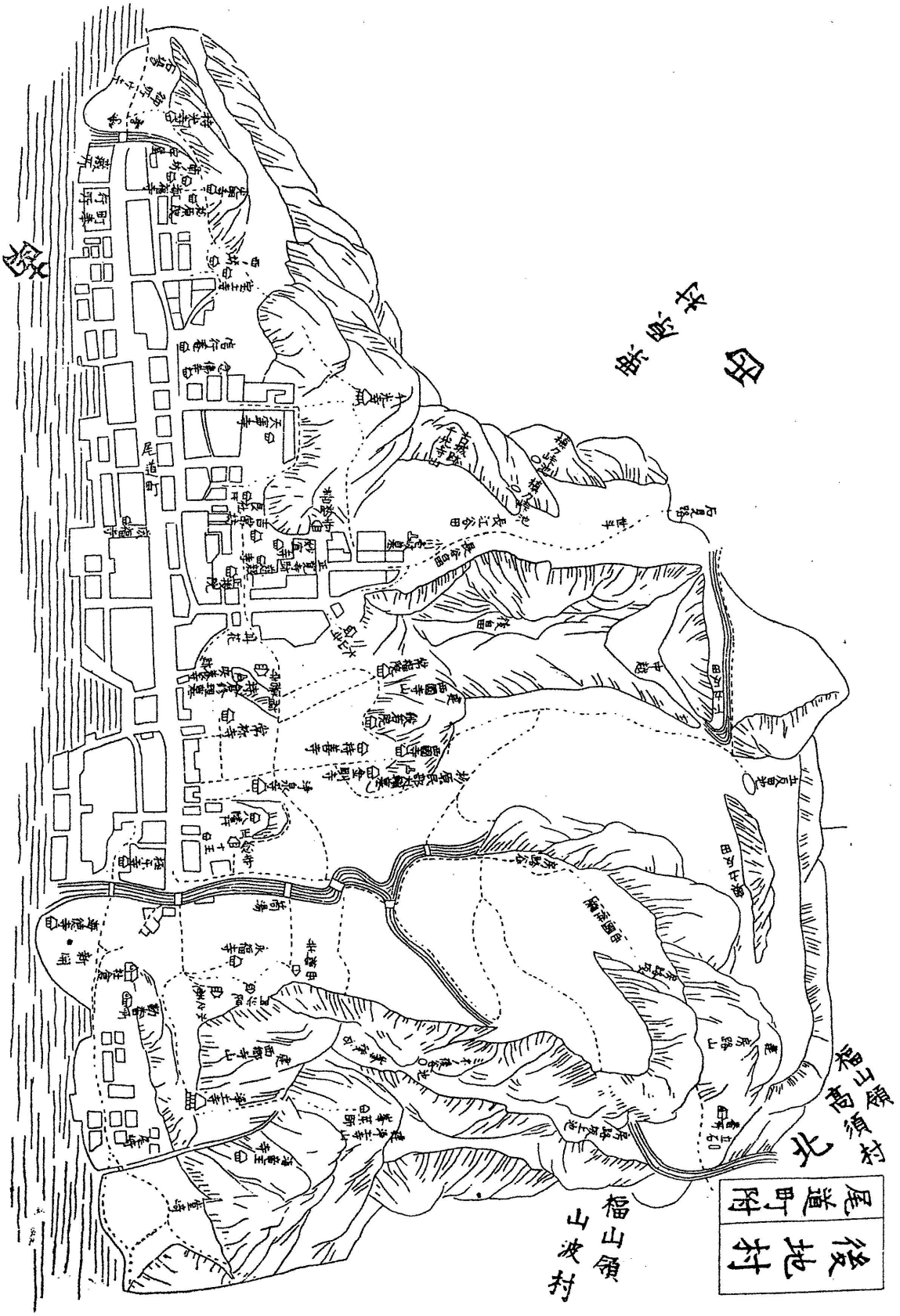
(3) 六十六銀行は藝備銀行となっていて、その左（西側）に尾道銀行の名がある。

(4) 水上警察（市役所の左側）は大正十三年には駅の近くに移っている。
また市役所と水上警察の間に長江川があるが大正十三年には暗渠になっている。

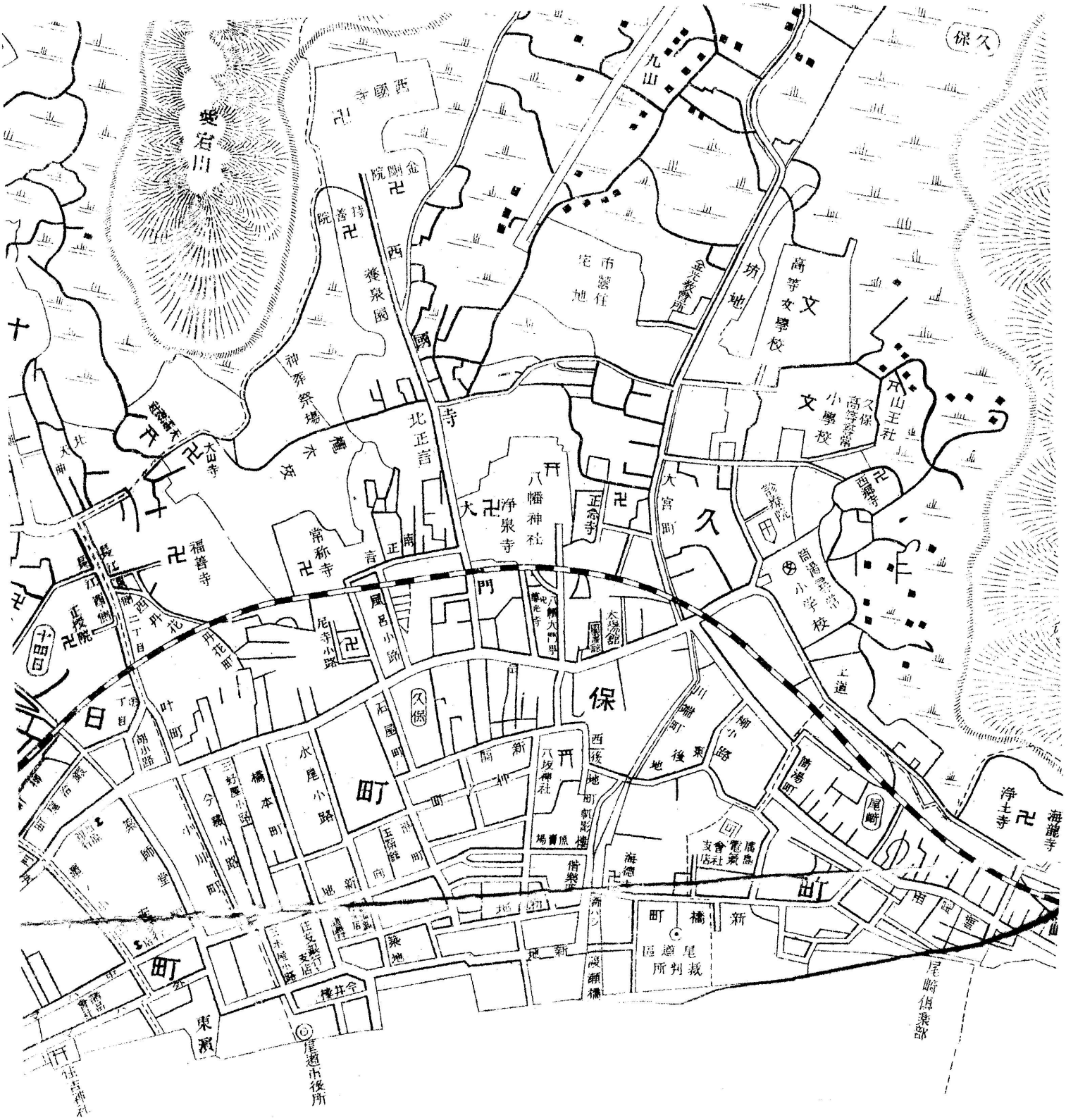
(5) 魚市場の名があるが、魚市場は何度も移転している。

(6) 藝藩通志に載っている「極楽寺」は前回訪れた「八坂神社」（大きな玉乗り狛犬とかんざし灯籠があった神社）の西側のすぐ近くに「極楽寺」があったが（当時は後地村）後に廃寺となり寺の後の痕跡は見られない。

「尾道案内」の地図より


東
北
福山領高須村
福山領山波村
尾道町

尾道市市勢要覧の地図　（大正十三年八月一日）



備陽史探訪の会

【事務局】
〒720-0824　広島県福山市多治米町5-19-8
TEL　084-953-6157
E-mail　info@bingo-history.net

公式サイト
http://bingo-history.net